

第4章 平成18年度(第19次)発掘調査

第1節 調査の概要

(1) 調査の概要 (図23・24)

千畳敷及び周辺地区(第2ブロック)の発掘調査は平成17年度で終了し、翌年度からは三城及び周辺地区(第3ブロック)の発掘調査に着手した。

当該地区については、1次調査において千畳敷から約150m西に位置する曲輪「三城」のほぼ全域に調査区(B地区)を設定し、発掘調査を行った結果、掘立柱建物跡(SB03～SB07)や門跡(SB08)、柵列跡(SA01)、導水状遺構(SD09)、溝跡(SD07・SD08)、道路状遺構(SX01)などを検出した。また、三城南側の帯曲輪にJ地区及びF地区を設定し、それぞれ2棟(SB09・SB10)と3棟(SB11～SB13)の掘立柱建物跡を検出している。ただし、この2つの調査区は、三城を圍繞するように配される帯曲輪のごく限られた範囲の調査であり、三城周辺において帯曲輪にどのような城郭関連施設が存在したのか不明確であった。

このことから、三城周辺の帯曲輪における遺構の配置状況を発掘調査で明らかにすることによって、宇土城跡全体における三城の曲輪としての機能や特徴などを明確にし、保存整備事業の内容に反映させる目的で、平成18年度から平成24年度にかけて計7次にわたる発掘調査を実施した。このうち、本書では平成18年度(19次調査)から平成20年度(21次調査)までの調査内容について報告する。

19次調査は、平成18(2006)年9月から同10月にかけて実施した。本調査の目的は、平成19年度より予定していた三城及び周辺地区(第3ブロック)の保存整備事業に伴う遺構確認を目的としたものである。三城南側や東側の帯曲輪などに計7ヶ所のトレンチを設定し、発掘調査を実施した。調査面積は、T1901:約70㎡、T1902:約43㎡、T1903:約15㎡、T1904:約43㎡、T1905:約4㎡、T1906:約4㎡、T1907:約4㎡の計183㎡である。

本調査では、1次調査で検出した導水状遺構SD09と道路状遺構SX01、溝跡SD07の配置状況を明らかにすることを目的に調査を実施した。

まず、SD09については、遺構の南端部の確認するために三城南側に隣接する切岸及び帯曲輪においてT1901を設定した。1次調査では、SD09の横断面形状から判断して木樋が存在した可能性があること、水溜め状遺構SK04を伴うことなどから、導水状遺構と報告されていたが、その南端部分がどのようなあり方を示すのかを明らかにすることにより、その性格について検討するための資料を得る必要があった。

調査の結果、三城南側直下の帯曲輪では、その存在を確認することはできなかった。この帯曲輪では1次調査において掘立柱建物跡SB07を検出しているが、この建物跡は三城南側の切岸から5m程しか離れていないことから、この地形は後世の開削に伴って形成されたのではなく、中世段階に形成され、ほぼ当時の地形を留めていると想定される。おそらく、SD09は三城南側帯曲輪には存在せず、三城南側切岸に開口していた可能性が高い。

また、1次調査検出の道路状遺構SX01に関しては、調査当時、三城に通じる古道として認識されていた遺構であるが、検出地点から南側部分の配置状況が不明確であったことから、T1902とT1903を設定して調査を実施した。その結果、両トレンチにおいてSX01に通じるとみられる道路状遺構を検出し

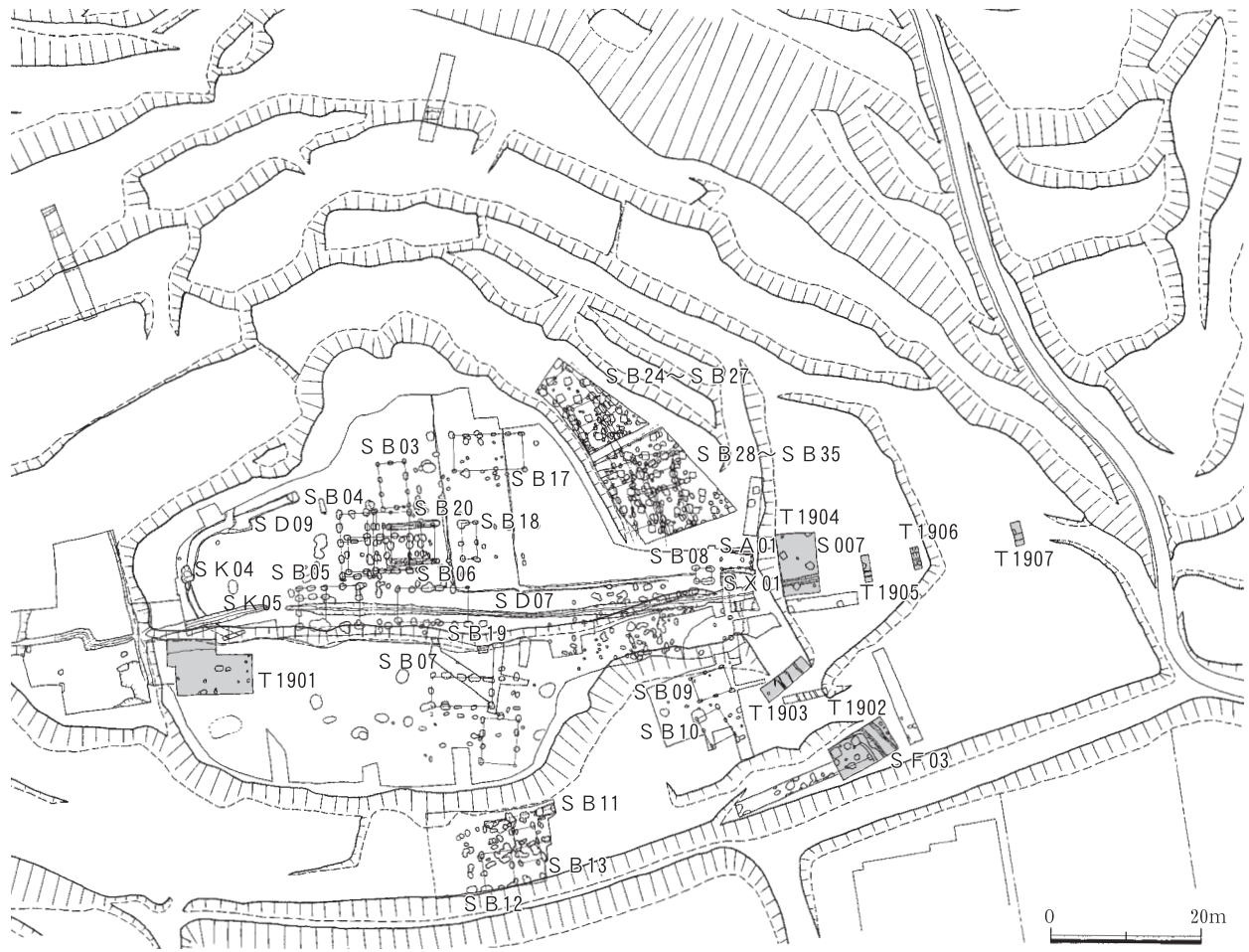


図23 19次調査区配置図 (1/1,000, アミ部分：19次調査区)

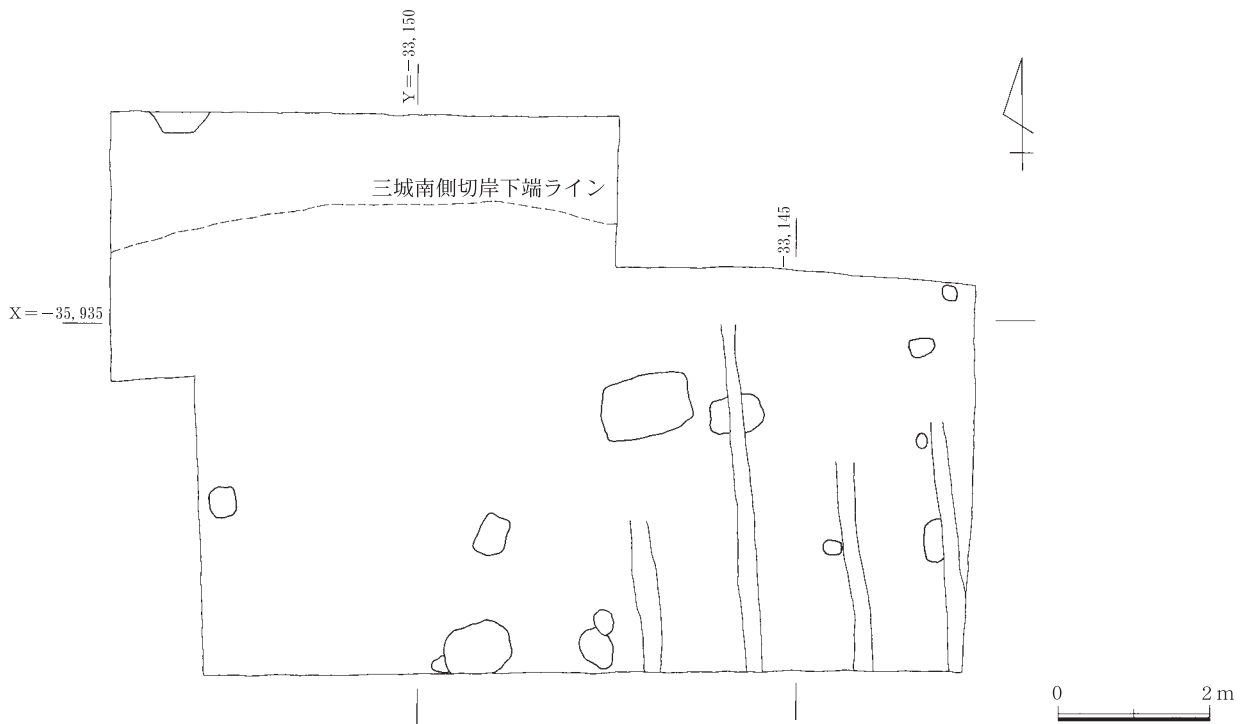


図24 T1901遺構配置図 (1/100)

た。なお、「道路状遺構」については、2001年刊行の『宇土城跡（西岡台）』Ⅳ（宇土市埋蔵文化財調査報告書第22集）以降、「SF」の略標記を用いていることから、これを踏襲し、19次調査検出の道路状遺構は「SF03」と標記する。

最後に、SD07については、三城南端に東西方向に延びており、1次調査における遺構の重複関係から判断して、三城の遺構群では最も新しい時期に位置づけられる。この遺構は三城へ向かうために必要な道路状遺構SF03(SX01)をも削平しており、保存整備の対象とする遺構を検討するうえで、その時期や性格を明確にする必要があった。このことから、三城東側の帯曲輪にT1904～T1907を設定し、調査を行った結果、地形とは無関係に東方向にさらに延びることを確認したことから、城郭として機能していた中世段階の遺構とは認定し難いとの知見が得られた。

以上の調査の結果、遺構埋土や遺構外より土師質土器の坏や瓦質土器の捏鉢や火鉢、青磁や白磁、染付などの中国製陶磁器などが出土した。

（２）調査日誌抄

平成18（2006）年

9月20日	調査前状況写真撮影。T1901～T1903の表土除去開始。	28日	T1902遺構検出状況写真撮影。
21日	T1904表土除去及び遺構検出作業開始。第1次調査で確認された溝跡SD07を検出。	10月3日	T1902でSF03に伴う硬化面を検出。道路として機能していた可能性が高いことが判明。
22日	T1904の遺構検出面において、バックホウで土地改変を受けた痕跡を確認。体験発掘の準備。	5日	T1902とT1904の遺構精査後、写真撮影。
23日	T1904遺構検出終了、遺構検出状況写真撮影。	11日	T1901とT1903の遺構精査後、写真撮影。
24日	宇土城跡第1回体験発掘（親子連れを中心に20名参加。翌日の熊本日日新聞に掲載）。	12日	T1903遺構掘り下げ状況写真撮影。SD07配置状況確認のため、T1905とT1906を設定。
26日	T1902で第1次調査において検出された道路状遺構SF03(SX01)とみられる遺構を検出。	13日	T1905・T1906でSD07を確認。
		16日	T1905・T1906の調査完了。両トレンチの写真撮影。
		31日	遺構配置図作成、土層断面実測作業終了

第2節 検出遺構

SF03（図25・26、図版9～11）

T1902で検出した北西－南東方向に主軸をもつ道路状遺構である。本遺構の配置状況や位置関係から、1次調査において検出した道路状遺構SX01と同一遺構とみられる。また、T1902で検出した道路状遺構についても、1次調査検出のSX01と近接しており、同一遺構と判断される。つまり、1次調査の見もあわせると、長さ約30m（未掘部分を含む）、高低差約6mにわたって三城へと通じる道路の存在が今回の調査でより明確になったといえる。

T1902における検出規模は、長さ約5.0m、幅約2.0～2.5m、底幅約1.4～1.5mで、緩やかに南東側へ下降している。路面両端に側溝を有しているが、東側では途中で消失している。西側の側溝は、土層断面の状況から掘り直されている可能性が高い。また、路面北側では削平されていたが、長さ約3.6m、幅約0.7～0.9mにわたって2層に分けられる硬化した土層を確認した。また、T1903における検出規模は、長さ約1.9m、幅1.1m以上で、西側に幅約0.2～0.3mの側溝SD13を確認した。

埋土より、土師質土器や瓦質土器、中国製陶磁器などが出土したが、小片のため瓦質土器の捏鉢・火鉢のみを図化した。

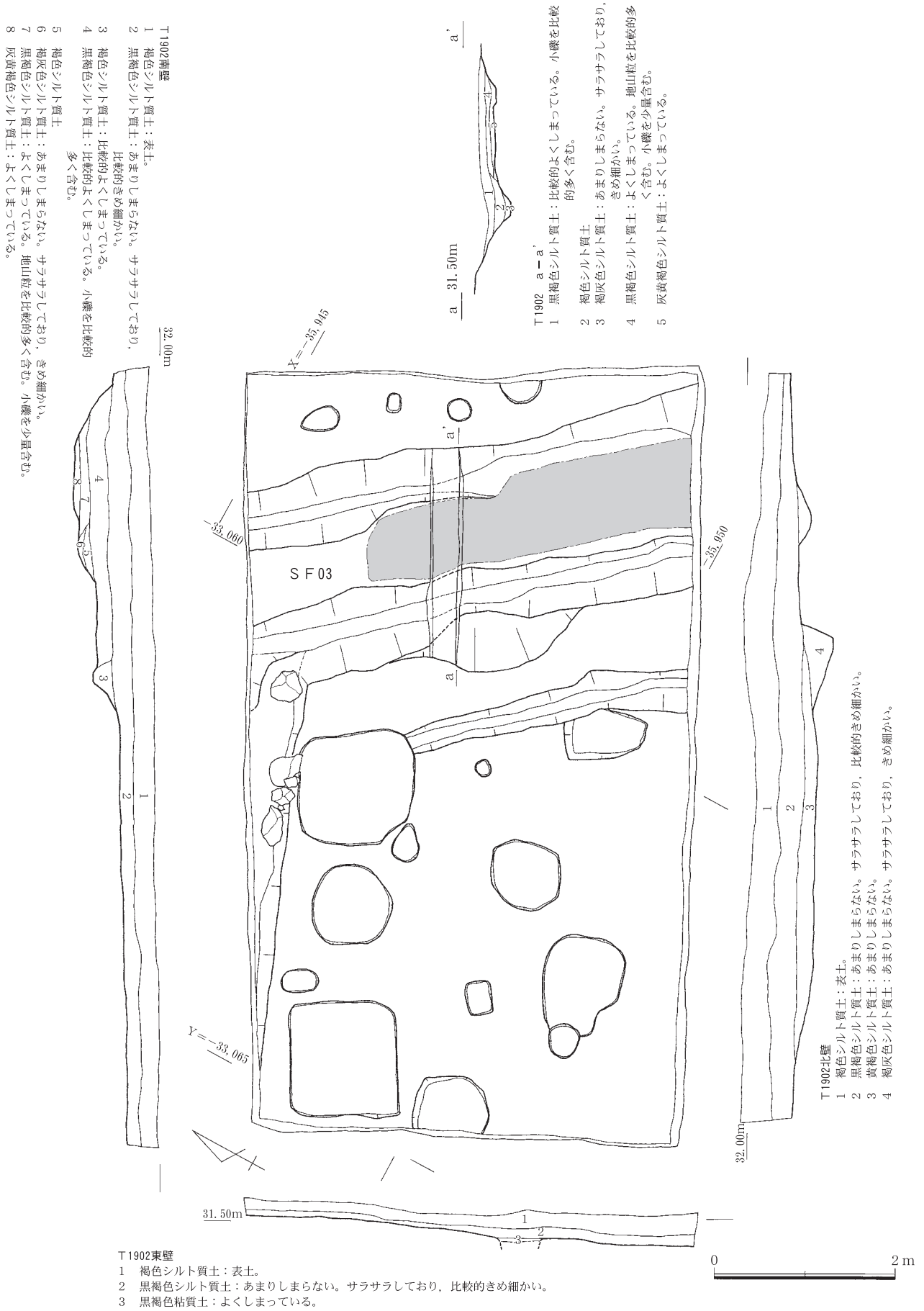


図25 T1902遺構配置図及び土層断面図（1/60，アミは硬化面の範囲）

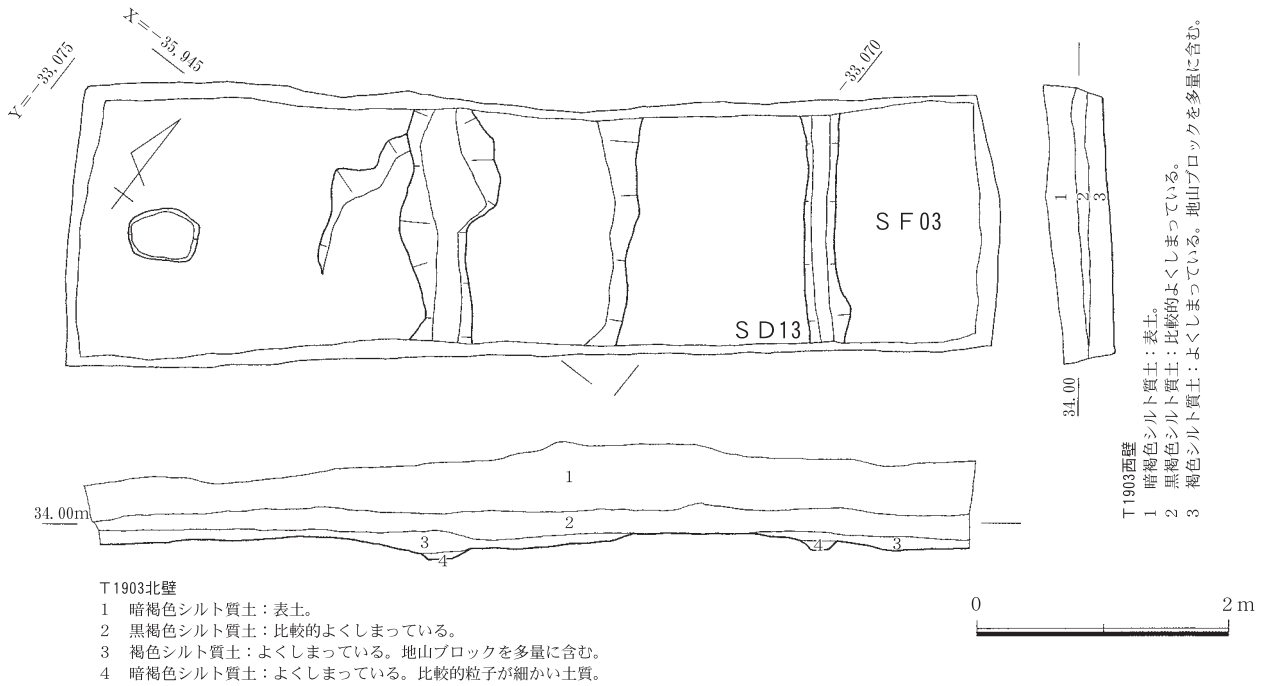


図26 T1903遺構配置図及び土層断面図 (1/60)

SD07 (図27~30, 図版11・12)

三城南端に東西方向に配置される溝跡である。1次調査では、三城を横断するような状態で、幅約0.5~1.2m、深さ約0.3~1.1m、長さ約63mにわたって検出した。19次調査では、SD07の延長線上である三城東側帯曲輪において、ある程度の距離をもって設定したT1904~T1907を設定し、調査した結果、SD07と同じ延長方向で同規模の溝跡を検出した。このことから、これらのトレンチで検出した溝跡はSD07と判断され、未掘部分を含めて長さ100m以上、高低差約10mにわたって三城及び周辺の帯曲輪を南北に分断するような状態で配置される溝跡であることが判明した。

T1904における検出規模は、長さ約4.8m、幅約0.7~1.0m、底幅約0.2~0.3m、深さ約0.3~0.5m。断面逆台形の箱堀状を呈し、傾斜角度は約70°である。底面は東に向かって緩やかに下降している。T1905とT1906の検出規模は、前者が長さ約0.8m、幅約0.9m、底幅約0.6~0.7m、深さ約0.2m、後者が長さ約1.0m、幅約1.6~1.9m、底幅約0.1~0.2m。T1906では、底面幅が狭く断面形状は薬研堀状を呈する。また、T1907では、長さ約1.0m、幅約0.7m。埋土の掘り下げは行っていない。

前述のとおり、三城へと通じる道路状遺構を分断するなど、城郭関連遺構や地形とは無関係に東西方向に配置される状況から、中世段階の城郭関連遺構とは考え難く、また、1次調査で17世紀初頭から前半にかけての唐津焼の皿が出土していることを考慮すれば、16世紀後半から末頃の廃城後に掘削された溝跡の可能性が高いと考えられる。

埋土より、土師質土器や瓦質土器、中国製陶磁器(青磁)などが出土したが、小片のため青磁碗のみを図化した。

第3節 出土遺物

SF03 (図31, 表4, 図版12)

1・2は瓦質土器である。1は底部が残存する捏鉢で、内面はナデ、外面は格子目状のタタキを施す。

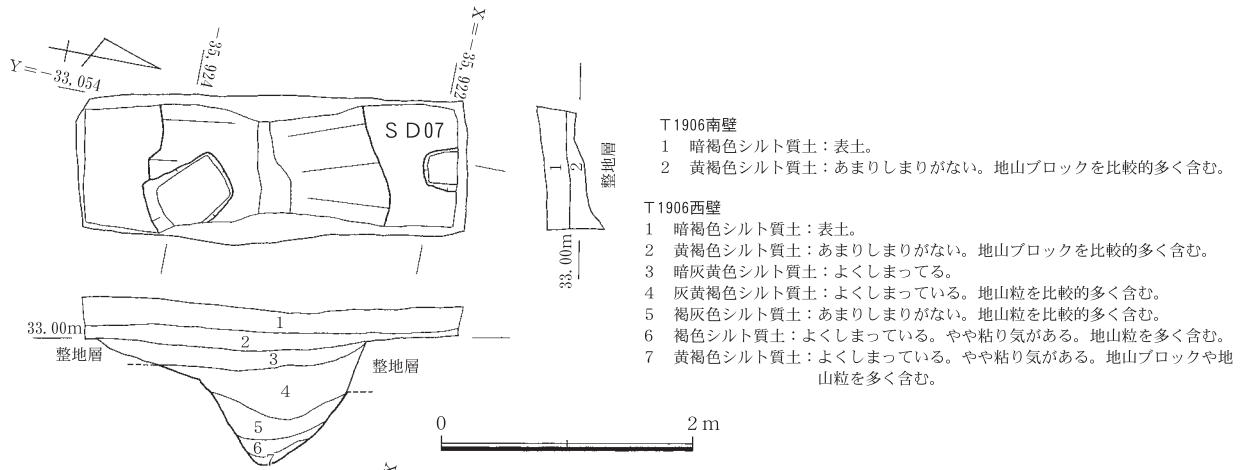


図29 T1906遺構配置図及び土層断面図 (1/60)

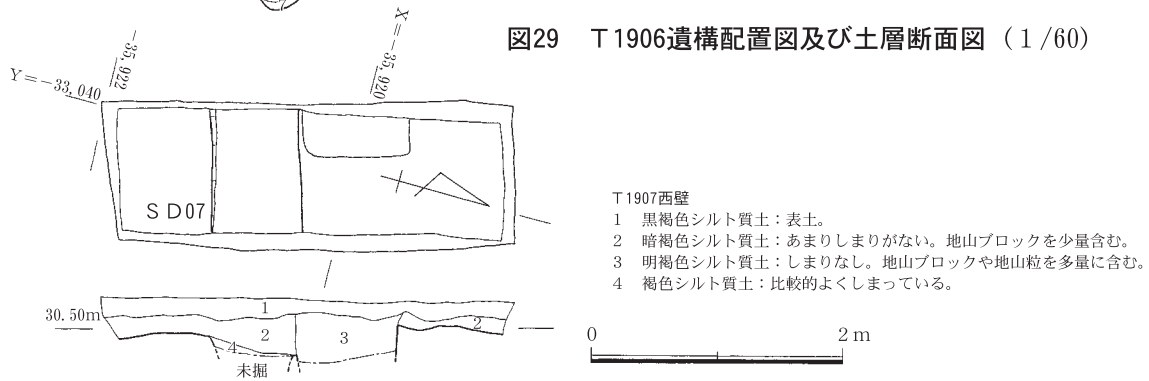


図30 T1907遺構配置図及び土層断面図 (1/60)

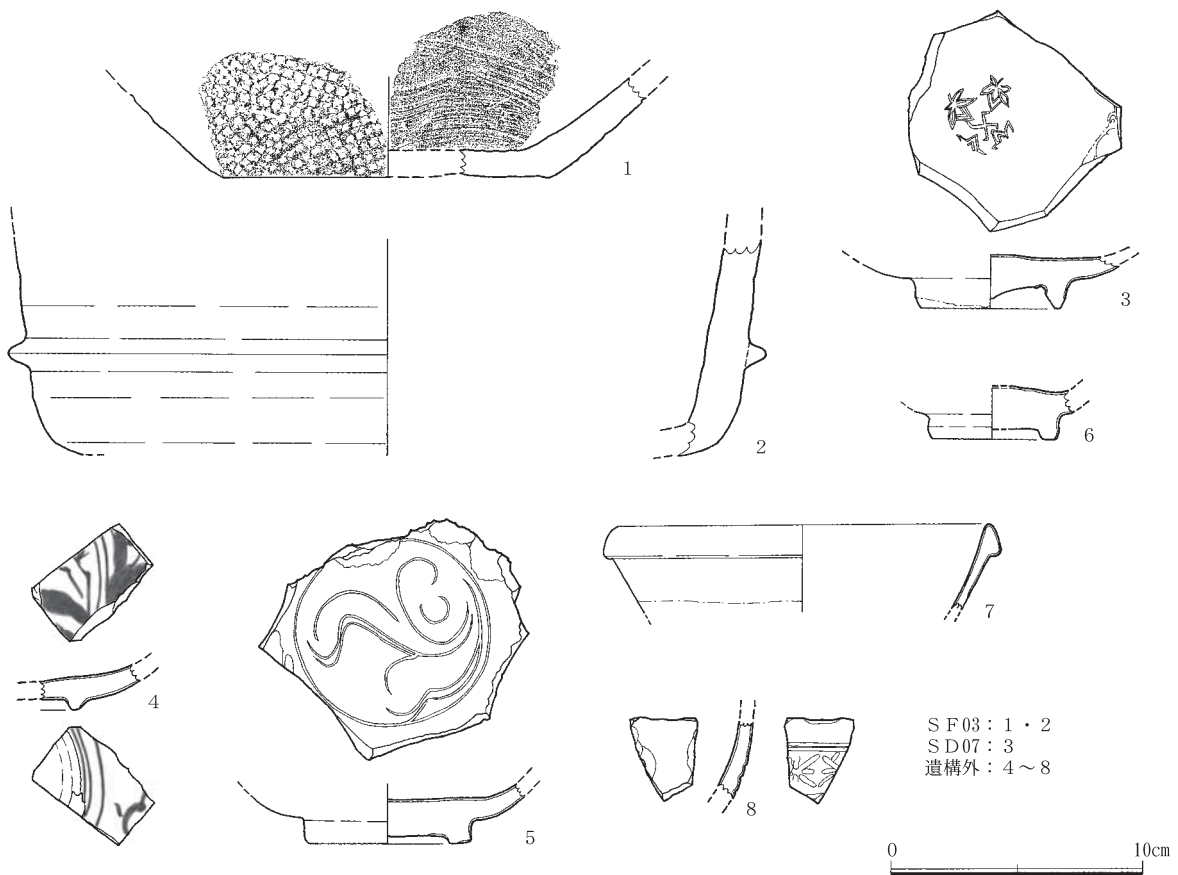


図31 19次調査出土遺物 (1/3)

2は体部下半から底部が残存する火鉢で、底部外面に突帯をめぐらせる。

S D 07 (図31, 表4, 図版12)

3は14世紀から15世紀前半にかけての龍泉窯系青磁の碗である。底部のみが残存し、高台内は露胎で、見込みに劃花文を施す。

遺構外出土遺物 (図31, 表4, 図版12)

4はT1901出土の肥前系の染付皿で、製作年代は18世紀。内外面に文様を施す。5はT1902出土の青磁碗。12～13世紀代の龍泉窯系のもので、見込みにヘラ先で劃花文を施文する。6～8はT1903出土。6は14世紀後半から15世紀前半にかけての龍泉窯系の青磁碗。7は玉縁口縁の白磁碗で、13世紀代の中国製。8は1610年代から17世紀後半にかけての肥前系の三島手で、器種は鉢とみられる。

表4 19次調査出土遺物観察表(カッコ内の数字は復元値を示す)

S F 03 ※層位はT1902 a - a' の土層

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調(釉薬/胎土)	器面調整(内面/外面)	調査 地点	層位	法量(cm)		備考
									口径	器高	
1	19-8	瓦質土器・捩鉢	角閃石, 1~2mm程の砂粒	良好	灰/灰	ナデ/タタキ	T1902	2	残4.0	13.6	
2	19-5	瓦質土器・火鉢	角閃石, 石英, 1mm程の砂粒	良好	灰白/灰黄	ナデ/ヨコナデ	T1902	2	残8.6	(28.0)	

S D 07 ※層位はT1904 a - a' の土層

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調(釉薬/胎土)	器面調整(内面/外面)	調査 地点	層位	法量(cm)		備考
									口径	器高	
3	19-3	青磁・碗	緻密	良好	オリーブ灰/灰白	施文, 施釉/ロクロケズリ, 施釉	T1904	1	残2.1	6.0	龍泉窯系

遺構外出土遺物

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調(釉薬/胎土)	器面調整(内面/外面)	調査 地点	層位	法量(cm)		備考
									口径	器高	
4	19-1	染付・皿	緻密	良好	明緑灰/灰白	施文, 施釉/施文, 施釉	T1901	-	残1.8	-	肥前系
5	19-2	青磁・碗	緻密	良好	オリーブ黄/にぶい黄	施文, 施釉/ロクロケズリ, 施釉	T1902	-	残2.4	6.6	龍泉窯系
6	19-4	青磁・碗	緻密	良好	オリーブ灰/灰白	施釉/施釉	T1903	-	残2.1	-	龍泉窯系
7	19-7	白磁・碗	緻密	良好	灰白/灰黄	施釉/施釉	T1903	-	残3.7	-	中国製
8	19-6	三島手・鉢?	緻密	良好	暗灰黄/灰褐	施釉/施文, 施釉	T1903	-	残3.4	-	肥前系

第5章 平成19年度(第20次)発掘調査

第1節 調査の概要

(1) 調査の概要 (図32~34)

第20次調査は、三城中心部より西へ約90mの地点にT2001とT2002の計2つの調査区を設けて調査を実施した。平成19(2007)年6月から同年8月までで発掘作業を終了し、一時休止後、10月から11月にかけて実測作業を行った。調査面積は、T2001：約74㎡、T2002：約39㎡の計113㎡である。

調査地点は、地元で「カラホリ」と呼称される大規模な横堀跡の隣接地であり、昭和62(1987)年の2次調査T8705で検出し、柵跡もしくは塀跡と想定したSA870501やその周辺の遺構の配置状況の確認を目的としたものである。SA870501は、「カラホリ」から東へ約11mの地点に位置し、長さ約9mにわたってほぼ並行に長径1.2~1.4m、短径0.8~0.9mの隅丸長方形のピットが5基並んでいる。1988年刊行の『宇土城跡(西岡台)』Ⅱで「空堀(カラホリ)に並行する柵または塀と思われる」と報告された遺構であるが、限られた面積の調査であり、過去に宇土城跡で検出した柵列跡のピットとくらべて著しく大型であることなど、柵や塀とするには追加調査が必要と判断された。

このことから、2次調査区の南北にT2001とT2002を設定して調査を実施したが、SA870501に伴う遺構は検出されなかった。また、本調査では、中世の土師質土器の皿や坏、瓦質土器の播鉢、中国製の



図32 20次調査区配置図 (1/1,000, アミ部分：20次調査区)

白磁や青磁、染付の碗や皿、土錘などが出土した。また、中世以外では須恵器の高台付碗などが出土した。

(2) 調査日誌抄

平成19(2007)年	30日	T2001・T2002遺構検出作業開始。	
6月6日	T2001・T2002設定。調査前状況写真撮影。表土除去開始。	8月6日	T2002遺構検出作業終了。
7日	T2002表土及び遺物包含層掘り下げ開始。	8日	T2001・T2002遺構検出作業終了、写真撮影。
26日	九州文化財研究所・永井孝宏氏来訪。	10日	T2001・T2002遺構埋土上層掘り下げ。写真撮影。
7月22日	第2回宇土城跡体験発掘(参加者31名)。	10月22日	T2001・T2002実測作業開始。
		11月29日	T2001・T2002実測作業終了。

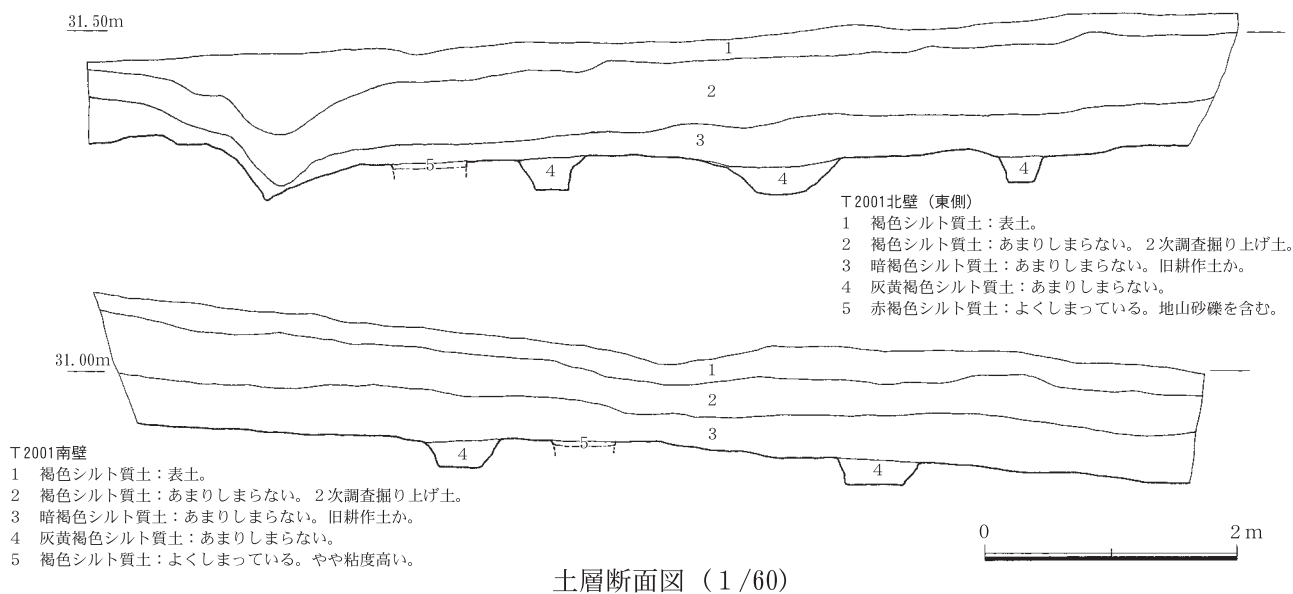
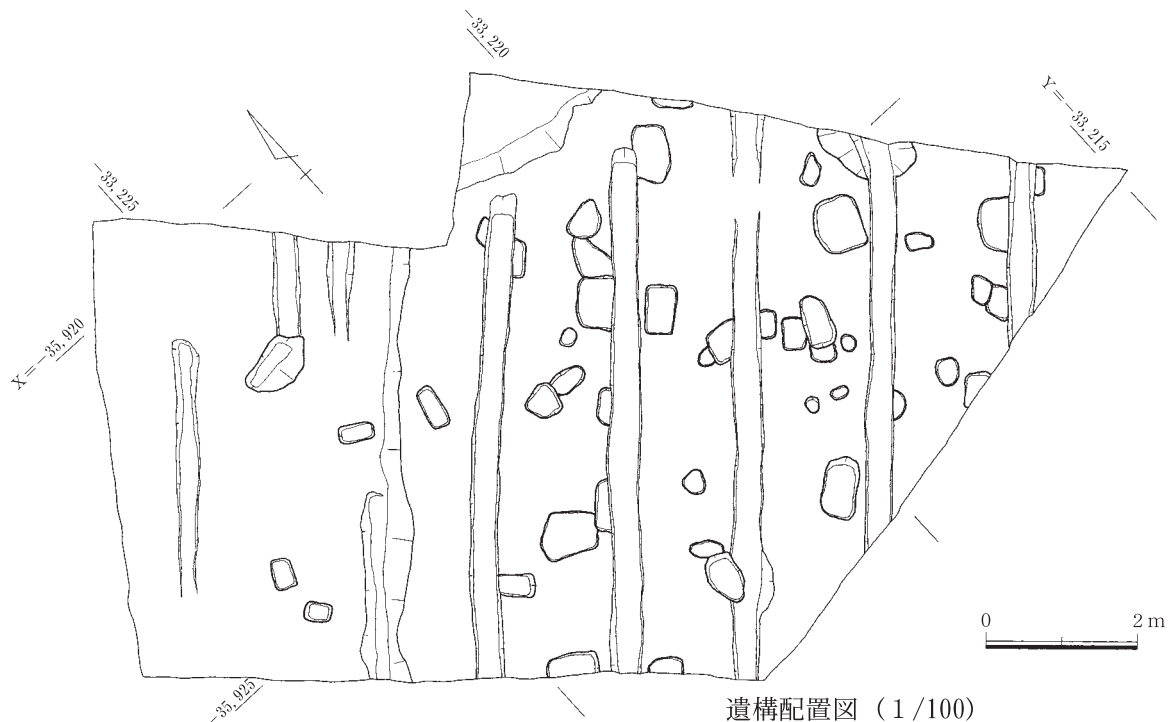


図33 T2001遺構配置図及び土層断面図 (1/60, 1/100)

第2節 調査区の概要

T2001 (図33, 図版13・14)

2次調査のT8705北側に設定した調査区である。重機により表土を除去し、旧表土層とみられる土層を人力で掘り下げ後、遺構検出作業を行った。その結果、散在的に広がるピットを検出したが、SA870501に伴うとみられる遺構は未検出であり、調査区内において掘立柱建物跡や柵列跡などの遺構は確認することができなかった。遺構外より、古代の須恵器や瓦質土器、中国製の青磁や染付、青銅製煙管が出土した。

T2002 (図34, 図版14)

T8705南側に設定した調査区である。ピットを数基検出したのみで極めて遺構密度が希薄であり、

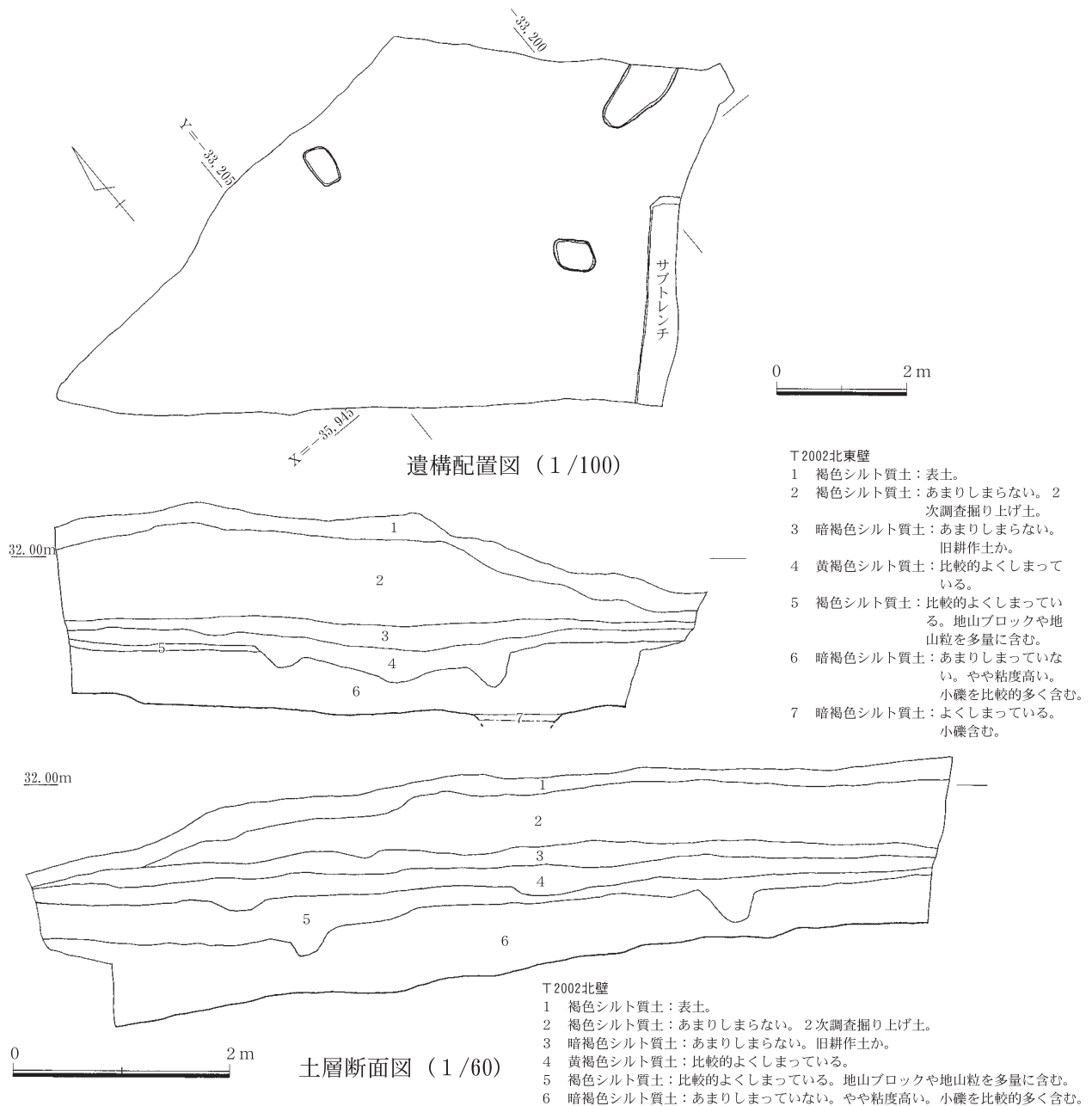


図34 T2002遺構配置図及び土層断面図 (1/60, 1/100)

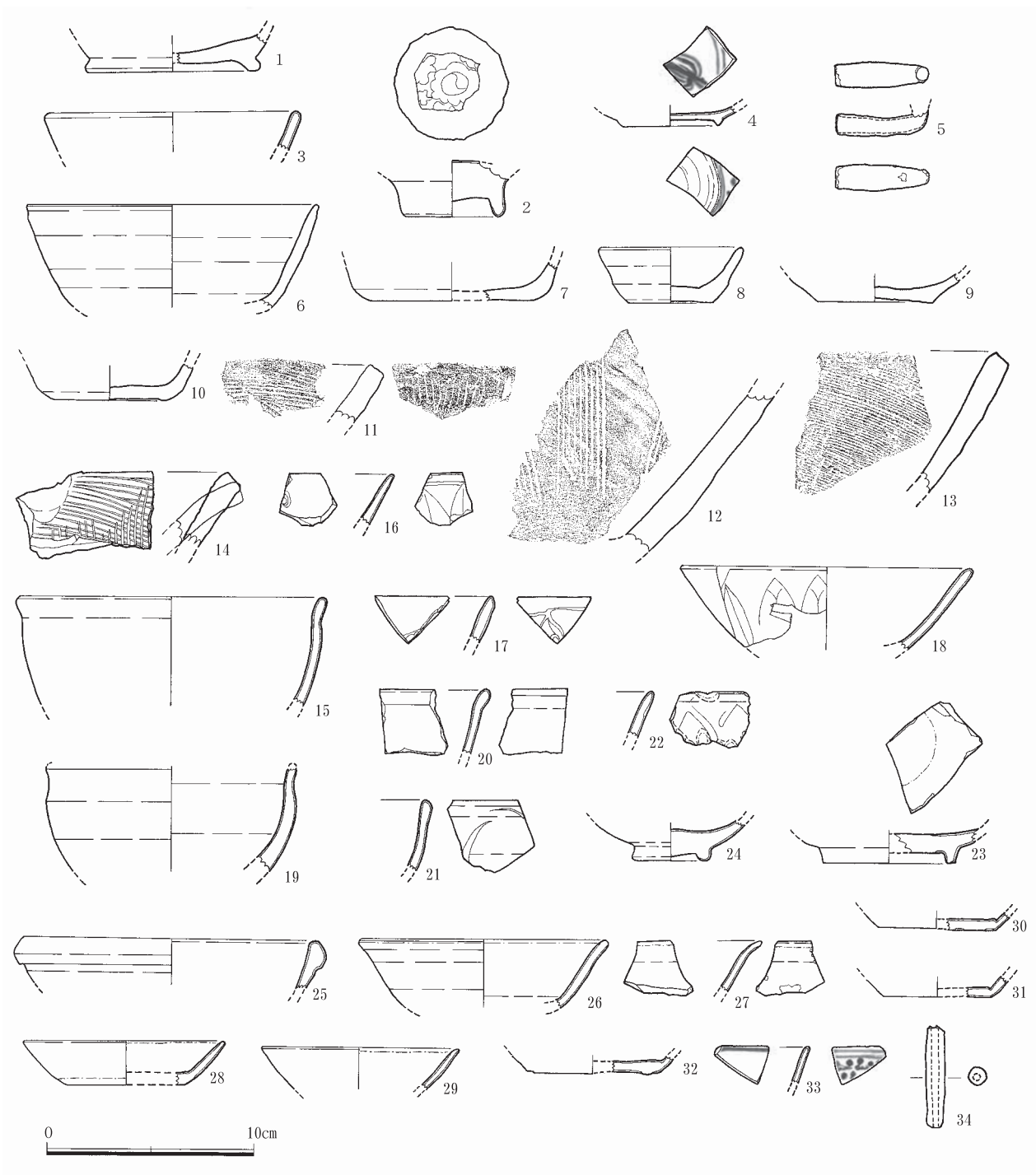


図35 20次調査出土遺物 (1/3)

S A870501に伴うとみられる遺構も未検出である。遺構外より、土師質土器や瓦質土器、中国製の青磁や白磁、土錘などが出土した。

第3節 出土遺物

遺構外出土遺物 (図35, 表6, 図版15)

1～5はT2001出土。1は古代の須恵器高台付碗である。内外面に回転ナデ調整を施す。2～4は中国製陶磁器で、2・3は15世紀代の龍泉窯系青磁碗、4は16世紀前半から中頃の景德鎮窯系染付小皿で

ある。2は底部片で見込みに劃花文状の文様を施す。4は底部片で、内外面に文様を施す。5は青銅製煙管の雁首部分である。

6～22はT2002出土。6は古代の須恵器碗で、内外面にヨコナデを施す。7～10は土師質土器で、7は皿、8～10は坏である。7～9は摩耗のため内外面とも器面調整は不明。10は内外面とも回転ナデ調整を施し、底部は糸切り離しである。9は二次的に被熱している。11～14は瓦質土器で、12・14は播鉢、11はその可能性があるもの、13は捏鉢である。12は内面に9本単位の播目を施しており、使用による摩耗がみられる。

15～33は中国製陶磁器で、15～18、20～24は龍泉窯系青磁、19・25～32は白磁、33は景德鎮窯系染付である。15は内外面とも無文の碗で、14世紀後半から15世紀中頃の製作。16～18は13世紀代から14世紀前半頃の製作の碗で、外面に鎬蓮弁文を施文。19は無文の白磁碗で、14世紀代の製作。20は14世紀後半から15世紀中頃の碗で、口縁部が短く外反する。21は15世紀頃の碗である。22は13世紀代から14世紀前半頃製作の碗で、外面に鎬蓮弁文を施す。23は14世紀後半から15世紀中頃にかけての碗で、見込みを円形状に釉剥ぎしている。24は13～14世紀代の小碗の底部で、高台内は露胎である。25は玉縁口縁の碗で、13世紀から14世紀前半頃の製作。26～32は13世紀から14世紀の口禿白磁の皿である。33は16世紀前半から中頃にかけての碗で、内外面に文様を施す。

34は土錘である。両端を欠損している。外面はナデ調整を施し、中央部が最も太く、端に向かうにつれてすぼまる。

表5 20次調査出土遺物観察表（カッコ内の数字は復元値を示す）

T 2001遺構外出土遺物（土器）

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調（内面/外面）	器面調整（内面/外面）	層位	法量（cm） 口径 器高 底径	備考
1	20-10	須恵器・高台付碗	1mm以下の砂粒	良好	灰/灰	回転ナデ/回転ナデ	-	残1.7 (8.0)	

T 2001遺構外出土遺物（陶磁器）

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調（釉薬/胎土）	器面調整（内面/外面）	層位	法量（cm） 口径 器高 底径	備考
2	20-15	青磁・碗	緻密	良好	オリーブ灰/灰白	施釉/ロクロケズリ, 施釉	-	残2.7 5.0	龍泉窯系
3	20-25	青磁・碗	緻密	良好	オリーブ灰/灰白	施釉/施釉	(12.4)	残1.9 -	龍泉窯系
4	20-28	染付・皿	緻密	良好	明緑灰/灰白	施文, 施釉/施文, 施釉	-	残0.9 (5.0)	景徳鎮窯系

T 2001遺構外出土遺物（青銅製品）

挿図 番号	実測 番号	種類	材質	色調	層位	法量（cm） 長さ 最大径	備考
5	20-11	煙管	青銅	緑青	-	残4.5 1.2	雁首部分

T 2002遺構外出土遺物（土器）

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調（内面/外面）	器面調整（内面/外面）	層位	法量（cm） 口径 器高 底径	備考
6	20-14	須恵器・碗	1mm以下の砂粒	良好	灰/灰	ヨコナデ/ヨコナデ	-	(14.0) 5.0	-
7	20-7	土師質土器・皿	長石, 1mm程の砂粒	やや不良	にぶい橙/にぶい橙	摩擦のため不明/摩擦のため不明	-	残1.9 (9.0)	-
8	20-19	土師質土器・環	1mm以下の砂粒	やや不良	橙/にぶい橙	摩擦のため不明/摩擦のため不明	-	(7.0) 2.7 (4.4)	-
9	20-27	土師質土器・環	雲母, 角閃石, 1mm程の砂粒	やや不良	橙/橙	摩擦のため不明/摩擦のため不明	-	残1.4 (5.8)	二次的に被熱
10	20-4	土師質土器・環	1mm程の砂粒	良好	明黄褐/明黄褐	回転ナデ/回転ナデ, 底部糸切り離し	-	残1.8 (7.0)	-
11	20-9	瓦質土器・擂鉢?	角閃石, 1~2mm程の砂粒	良好	灰/灰	ナデ/ケズリ, ナデ	-	残2.9 -	-
12	20-16	瓦質土器・擂鉢	角閃石, 1mm程の砂粒	良好	灰黄/黄灰	ナデ, 樋目/ユビオサエ, ナデ	-	残10.4 -	-
13	20-23	瓦質土器・捏鉢	角閃石, 1~2mm程の砂粒	良好	灰白/灰	ケズリ, ナデ/ユビオサエ, ナデ	-	残6.9 -	-
14	20-34	瓦質土器・擂鉢	雲母, 角閃石, 1~2mm程の砂粒	良好	灰/灰	ナデ, 樋目/ユビオサエ, ナデ	-	残3.8 -	-

T 2002遺構外出土遺物（陶磁器）

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調（釉薬/胎土）	器面調整（内面/外面）	層位	法量（cm） 口径 器高 底径	備考
15	20-1	青磁・碗	緻密	良好	灰オリーブ/灰白	施釉/施釉	-	残5.3 -	龍泉窯系
16	20-3	青磁・碗	緻密	良好	灰オリーブ/灰白	施釉/施文, 施釉	-	残2.5 -	龍泉窯系
17	20-5	青磁・碗	緻密	良好	明オリーブ灰/灰白	施釉/施釉	-	残2.2 -	龍泉窯系
18	20-32	青磁・碗	緻密	良好	オリーブ/灰白	施釉/施文, 施釉	(14.0)	残3.9 -	龍泉窯系
19	20-12	白磁・碗	緻密	良好	灰オリーブ/灰白	施釉/施釉	-	残5.0 -	-
20	20-17	青磁・碗	緻密	良好	灰オリーブ/灰黄	施釉/施釉	-	残3.2 -	龍泉窯系
21	20-20	青磁・碗	緻密	良好	オリーブ灰/灰白	施釉/施釉	-	残3.5 -	龍泉窯系
22	20-24	青磁・碗	緻密	良好	明オリーブ灰/灰白	施釉/施釉	-	残2.7 -	龍泉窯系

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調(釉薬/胎土)	器面調整(内面/外面)	層位	法量 (cm)		備考
								口径	器高/底径	
23	20-31	青磁・碗	緻密	良好	灰白/灰白	ロクロケズリ, 施釉/ロクロケズリ, 施釉	-	-	残1.6 (6.4)	龍泉窯系
24	20-6	青磁・碗	緻密	良好	オリーブ灰/灰	施釉/施釉	-	-	残1.9 3.8	龍泉窯系
25	20-29	白磁・碗	緻密	良好	灰白/灰黄	施釉/施釉	-	(15.2)	残2.3 -	中国製
26	20-13	白磁・皿	緻密	良好	灰色/灰白	施釉/施釉	-	(12.0)	残3.3 -	中国製
27	20-2	白磁・皿	緻密	良好	灰白/灰白	施釉/施釉	-	-	残2.5 -	中国製
28	20-30	白磁・皿	緻密	良好	灰白/灰白	施釉/ナデ, 施釉	-	(9.8)	2.1 (5.7)	中国製
29	20-33	白磁・皿	緻密	良好	灰白/灰白	施釉/施釉	-	(9.6)	残2.0 -	中国製
30	20-8	白磁・皿	緻密	良好	灰白/灰白	施釉/ロクロケズリ, 施釉	-	-	残0.9 (5.8)	中国製
31	20-18	白磁・皿	緻密	良好	灰白/灰白	施釉/施釉	-	-	残1.0 (5.4)	中国製
32	20-21	白磁・皿	緻密	良好	灰白/灰白	施釉/施釉	-	-	残0.9 (6.6)	中国製
33	20-26	染付・碗	緻密	良好	明緑灰/灰白	施文, 施釉/施文, 施釉	-	-	残1.8 -	景德鎮窯系

T2002遺構外出土遺物(土製品)

挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調	器面調整	層位	法量 (cm)		備考
								長さ	最大径	
34	20-22	土錘	角閃石, 1mm以下の砂粒	良好	橙	ナデ	-	残4.9	0.9	

第6章 平成20年度(第21次)発掘調査

第1節 調査の概要

(1) 調査の概要 (図36～38, 図版16)

第21次調査は、三城東側の帯曲輪の遺構確認を目的として実施した。土層観察用ベルトを挟んで北側の調査区を2101区、南側を2102区とし、平成20(2008)年11月から21年1月までの期間で実施した。調査面積は、2101区：約93㎡、2102区：約171㎡の計264㎡である。

調査の結果、果樹の植え込み跡とみられる掘り込みによって調査区全面に攪乱を受けていたものの、掘立柱建物跡を12棟(SB24～SB35)検出した。これらは重複関係があり、当地に数時期にわたり建物が存在したことが判明した。これらの柱穴については、遺構保護を目的として埋土を約3～5cm程度とごく浅く掘り下げたのみで完掘していない。第3ブロック(三城及び周辺地区)における保存整備を目的として実施した第19～25次(平成18～24年度)の計7次にわたる発掘調査のなかでも、当該地点は遺構密度が最も高いことが判明している。城の機能を支える何らかの建物が恒常的に存在したとみられる。また、2102区東側では、盛土整地が行われていることが明らかになった。

以上の調査で、中世の土師質土器の坏、瓦質土器の壺、中国製青磁や白磁、染付の碗や皿、古銭、近世の肥前系陶磁器の白磁皿などが出土した。それ以外では、弥生時代の石包丁や古墳時代の須恵器の高坏蓋などが出土した。

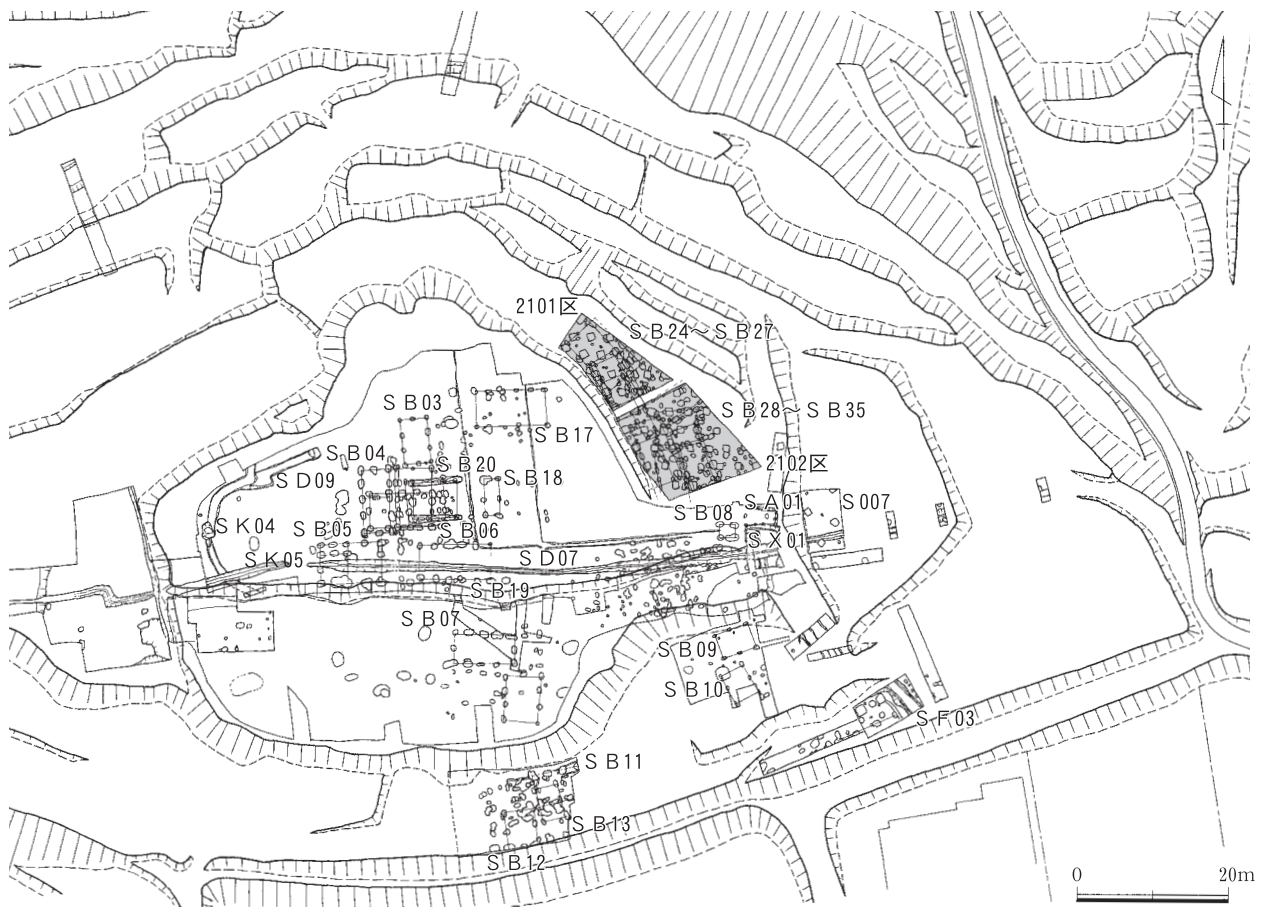


図36 21次調査区配置図 (1/1,000, アミ部分：21次調査区)

(2) 調査日誌抄

平成20(2008)年	17日	遺構埋土上層掘り下げ(3~5cm程度)完了。	
11月12日	調査前状況写真撮影。重機による表土除去作業。	19日	2101区, 2102区調査区清掃, 発掘状況写真撮影。
14日	2101区, 2102区の遺物包含層掘り下げ。		2101区遺構実測図(縮尺1/20)作成開始。
16日	第3回宇土城跡体験発掘(参加者14名)。	25日	空中写真撮影(株式会社熊本航空)。
25日	2102区遺構検出作業開始。	平成21(2009)年	
28日	2102区東側で盛土整地層を確認。	1月6日	2102区遺構実測図(縮尺1/20)作成開始。
12月4日	2101区遺構検出作業開始。	30日	遺構実測作業完了。
16日	2101区, 2002区遺構検出状況写真撮影。		

第2節 検出遺構

S B 24 (図37, 図版16・17)

2101区南側で検出した桁行3間, 梁行1間の掘立柱南北棟建物跡。規模は桁行約6.1m, 梁行約3.8mで, 削平により一部の柱穴が失われている。柱間寸法は桁行約2.0m(約6尺5寸), 梁行約12尺5寸である。S B 26, S B 27と重複しており, S B 24→S B 26→S B 27の順に建てられている。

S B 25 (図37, 図版16・17)

2101区南側から2102区北側で検出した桁行3間, 梁行1間の掘立柱南北棟建物跡。規模は桁行約5.5m, 梁行約3.2m(約10尺6寸)で, 西側柱筋はS B 26, S B 27と重複している。柱間寸法は桁行約1.8~2.0m(約6尺~6尺5寸)である。重複関係より, S B 25→S B 26→S B 27の順に建てられている。

S B 26 (図37, 図版16・17)

2101区南側から2102区北側で検出した桁行4間, 梁行1間の掘立柱南北棟建物跡。規模は桁行約8.6m, 梁行約4.0m(約13尺2寸)で, 柱穴の一部は削平されている。柱間寸法は桁行約2.0~2.5m(約6尺5寸~8尺3寸)である。S B 24, S B 25, S B 27と重複しており, S B 24・S B 25→S B 26→S B 27の順に建てられている。

S B 27 (図37, 図版16・17)

2101区で検出した桁行4間, 梁行2間, 東庇付きの掘立柱南北棟建物跡。規模は桁行約8.9m, 梁行約4.7m, 庇の出が約1.4mで, 庇の最も北側の柱穴は調査区外である。柱間寸法は桁行約2.0~2.9m(約6尺5寸~9尺6寸), 梁行約2.0~2.6m(約6尺5寸~8尺6寸)である。21次調査で検出した12棟の建物跡のうち最も規模が大きく, 柱掘方の大きさも桁側では長辺1mを超えるものが多い。S B 24, S B 25, S B 26と重複しているが, これらの中では最も新しい時期に建てられた建物である。

S B 28 (図37, 図版16・17)

2102区北側で検出した桁行3間, 梁行2間の掘立柱東西棟建物跡。規模は桁行約5.7m, 梁行約4.5mで, 柱間寸法は桁行約1.5~2.2m(約5尺~7尺3寸), 梁行約1.5~3.0m(約5尺~9尺9寸)である。S B 30, S B 33~S B 35と重複しており, これらの建物跡のなかでは最も古い時期に位置付けられる。

S B 29 (図37, 図版16・17)

2102区西側で検出した桁行3間, 梁行1間の掘立柱南北棟建物跡。西側柱筋の一部は調査区外である。規模は桁行約6.2m, 梁行約3.4m(約11尺2寸)で, 桁行の柱間寸法は約1.6~2.4m(約5尺3寸~7尺9寸)。S B 28, S B 30と重複しており, S B 28→S B 29→S B 30の順で建てられている。



図37 21次調査遺構配置図 (1/150, アミは攪乱)

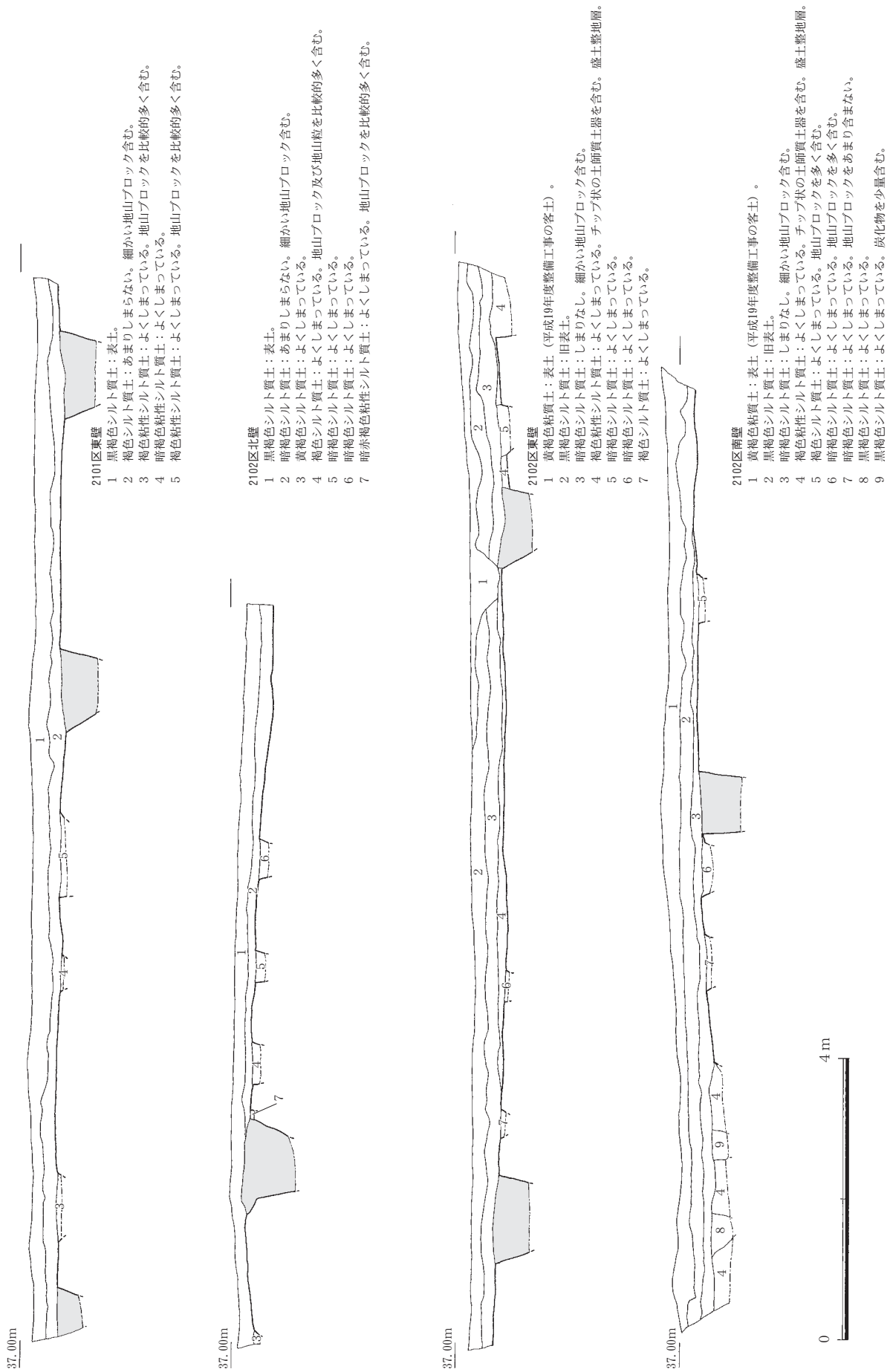


図38 21次調査区土層断面図（1/80、アミは攪乱）

S B 30 (図37, 図版16・17)

2102区北側で検出した桁行4間以上, 梁行2間の掘立柱東西棟建物跡。西側柱筋間で柱穴を検出している一方, 東側では検出していないため, さらに調査区外に延びる可能性がある。規模は桁行約7.6m以上, 梁行約4.0mで, 柱間寸法は桁行約1.5~1.7m (約5尺~5尺6寸), 梁行約1.7~2.3m (約5尺6寸~7尺6寸) である。S B 26, S B 28, S B 32と重複しており, S B 26・S B 28→S B 30→S B 32の順に建てられている。

S B 31 (図37, 図版16・17)

2102区南西側で検出した桁行3間以上, 梁行1間の掘立柱南北棟建物跡で, 調査区南側にさらに延びる可能性がある。規模は桁行約5.8m以上, 梁行約3.8m (約12尺5寸) で, 桁行の柱間寸法は約1.8~2.4m (約5尺9寸~7尺9寸) である。S B 34と重複しており, S B 31→S B 34の順に建てられている。

S B 32 (図37, 図版16・17)

2102区北側で検出した桁行4間以上, 梁行2間(推定)の掘立柱東西棟建物跡。規模は桁行約8.8m以上, 梁行約4.0m(推定)で, 柱間寸法は桁行約1.9~2.5m (約6尺3寸~8尺3寸), 梁行約2.0m (約6尺5寸) である。S B 30と重複しており, S B 30→S B 32の順に建てられている。

S B 33 (図37, 図版16・17)

2102区西側で検出した桁行4間以上, 梁行2間の掘立柱南北棟建物跡。北側柱筋間で柱穴を検出している一方, 南側で検出していないことから, 調査区外へ延びるか, もしくは削平のため確認できなかったとみられる。また, 西側柱筋の一部は調査区外である。検出規模は桁行約8.2m, 梁行約4.0mで, 柱間寸法は桁行約1.8~2.4m (約5尺9寸~7尺9寸), 梁行約2.0m (約6尺5寸) である。S B 28, S B 35と重複しており, S B 28→S B 33→S B 35の順に建てられている。

S B 34 (図37, 図版16・17)

2102区南側で検出した桁行3間, 梁行2間の掘立柱南北棟建物跡。規模は桁行約6.4m, 梁行約4.0mで, 柱間寸法は桁行約2.0~2.2m (約6尺5寸~7尺9寸), 梁行約1.9~2.1m (約6尺3寸~6尺9寸) である。S B 28, S B 31, S B 35と重複しており, S B 28・S B 31→S B 34→S B 35の順に建てられている。

S B 35 (図37, 図版16・17)

2102区南側で検出した桁行4間以上, 梁行2間の掘立柱南北棟建物跡。北側柱筋間で柱穴を検出している一方, 南側で検出していないことから, 調査区外へ延びるか, もしくは削平のため確認できなかったとみられる。規模は桁行約8.0m以上, 梁行約4.0mで, 柱間寸法は桁行約1.7~2.2m (約5尺6寸~7尺3寸), 梁行約1.8~2.2m (約5尺9寸~7尺3寸) である。S B 28, S B 33, S B 34と重複しており, これらの建物跡では最も新しい時期に建築されている。

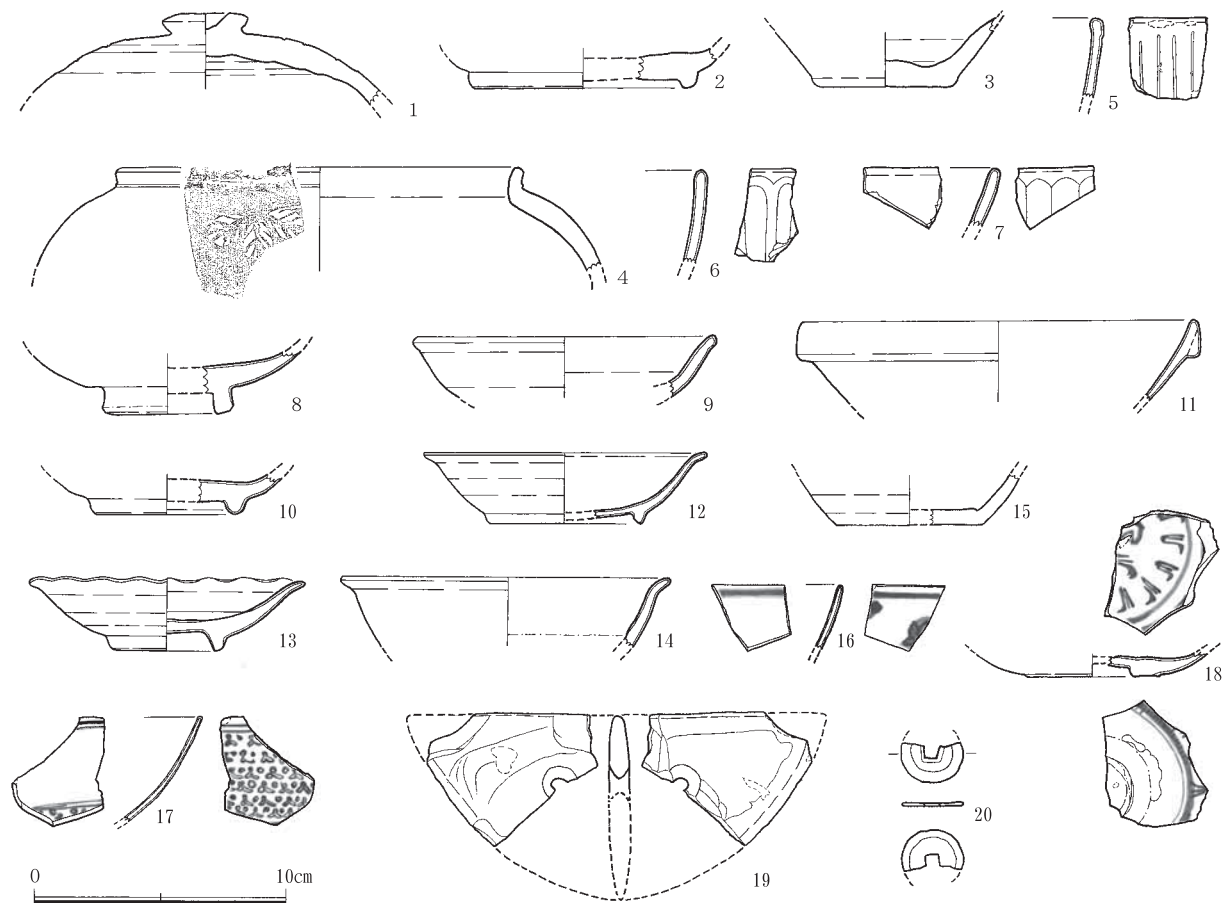


図39 21次調査出土遺物（1/3）

第3節 出土遺物

遺構外出土遺物（図39，表6，図版18）

1・2は須恵器。1は古墳時代の有蓋高坏の蓋で，外面は回転ヘラケズリ後にナデ，内面はナデを施す。2は古代の高台付碗である。3は土師質土器の坏で，底部は糸切り離し。4は瓦質土器の広口壺である。肩部に桐文状のスタンプを施す。

5～10は龍泉窯系青磁。5～8は剣先蓮弁文の碗で，5は15世紀中頃から16世紀前半，6・7は15世紀代の製作。8は14世紀から15世紀前半の碗の底部で，畳付及び高台内は露胎。9・10は皿で，いずれも14世紀後半から15世紀中頃の製作。10の高台内は露胎。11～15は白磁。13の肥前系以外は中国製。11は13世紀から14世紀前半の玉縁口縁の碗。12・14は景德鎮窯系の端反り皿で，16世紀代の製作。13は肥前系の白磁皿で，見込みは蛇の目釉剥ぎ。1820～1860年代の製作。15は口縁部を欠くが，器形から口禿皿とみられる。13世紀から14世紀前半の製作。16～18は景德鎮窯系染付。16は16世紀後半代の景德鎮窯系染付の碗。17はレンツー碗，18は碁笥底の皿で，いずれも16世紀前半から中頃の製作。

土器・陶磁器以外の出土遺物として，19の磨製の石包丁と20の古銭がある。19は粘板岩製で，形状から双孔を有していたとみられる。背部が直線状で，刃部は弧状を呈し，研磨を施す。20は方孔の古銭で，錆のため種類は不明である。

表6 21次調査出土遺物観察表(カッコ内の数字は復元値を示す)

遺構外出土遺物(土器)										
挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調(内面/外面)	器面調整(内面/外面)	調査 地点	層位	法量(Cm) 口径 器高 底径	備考
1	21-2	須恵器・高坏蓋	1mm程の砂粒	良好	にぶい黄/灰	回転ナデ/回転ヘラケズリ, ナデ	2102区	2	残3.7	
2	21-19	須恵器・高台付碗	1mm以下の砂粒	良好	灰/灰	ナデ/ナデ	2102区	2	残1.6 (9.0)	
3	21-18	土師質土器・坏	1~2mm程の砂粒	やや不良	橙/にぶい橙	摩耗のため不明/摩耗のため不明, 底部糸切り離し	2102区	2	残2.7 (5.6)	
4	21-20	瓦質土器・壺	雲母, 石英, 1mm以下の砂粒	良好	灰/灰	ナデ/ナデ, 施文	2102区	2	(16.0) 残4.2	
遺構外出土遺物(陶磁器)										
挿図 番号	実測 番号	器種	胎土	焼成	色調(釉薬/胎土)	器面調整(内面/外面)	調査 地点	層位	法量(Cm) 口径 器高 底径	備考
5	21-6	青磁・碗	緻密	やや不良	灰白/灰白	施釉/施文, 施釉	2102区	-	残3.2	龍泉窯系
6	21-11	青磁・碗	緻密	良好	オリーブ灰/灰白	施釉/施釉	2102区	-	残3.7	龍泉窯系
7	21-14	青磁・碗	緻密	良好	オリーブ灰/灰	施釉/施文, 施釉	2102区	-	残2.4	龍泉窯系
8	21-8	青磁・碗	緻密	良好	オリーブ灰/灰白	施釉/口ケケズリ, 施釉	2102区	-	残2.4 (5.0)	龍泉窯系
9	21-15	青磁・皿	緻密	良好	オリーブ灰/灰白	施釉/施釉	2102区	-	残2.4	龍泉窯系
10	21-12	青磁・皿	緻密	良好	オリーブ灰/灰白	施釉/口ケケズリ, 施釉	2102区	-	残1.6 (6.0)	龍泉窯系
11	21-7	白磁・碗	緻密	良好	灰白/灰白	施釉/施釉	2102区	-	残3.2	中国製
12	21-5	白磁・皿	緻密	良好	灰白/灰白	施釉/施釉	-	-	(11.0) 2.8 (6.0)	景德鎮窯系
13	21-13	白磁・皿	緻密	良好	灰白/灰白	口ケケズリ, 施釉/口ケケズリ, 施釉	2102区	-	(10.9) 2.9 (4.6)	肥前系
14	21-9	白磁・皿	緻密	良好	灰白/にぶい黄橙	施文, 施釉/施釉	2102区	-	(13.2) 残2.7	中国製
15	21-1	白磁・皿	緻密	良好	灰白/灰白	施釉/施釉	2102区	-	残2.0 (6.0)	中国製
16	21-4	染付・碗	緻密	良好	灰白/灰白	施文, 施釉/施文, 施釉	2102区	-	残2.6	景德鎮窯系
17	21-10	染付・碗	緻密	良好	明緑灰/灰白	施文, 施釉/施文, 施釉	2102区	-	残3.8	景德鎮窯系
18	21-16	染付・皿	緻密	良好	明緑灰/灰白	施文, 施釉/施文, 施釉	2102区	-	残0.9 (5.4)	景德鎮窯系, 替筒底
遺構外出土遺物(その他)										
挿図 番号	実測 番号	種類	材質	焼成	色調	調整	調査 地点	層位	法量(Cm) 長さ 厚さ 直径	備考
19	21-3	石包丁	粘板岩製	-	にぶい黄	刀部を研磨	2102区	-	残6.2 0.8	-
20	21-17	古銭	青銅	-	緑青	-	2102区	-	0.1 2.4	-

第7章 ま と め

(1) 千畳敷周辺における検出遺構（18次調査）について

18次調査では、千畳敷東側帯曲輪付近に設定したトレンチ（T1801, T1802）において、宇土城跡で唯一の竪堀と横堀の機能をあわせもつ堀跡SD03を検出した。現況地形から判断すれば、T1801付近から東方向に向かってさらに延び、現在、多目的広場として整備している平場付近まで存在した可能性が高い。千畳敷周辺で検出した竪堀跡SD19やSD22と比べて幅が狭く小規模であるが、壁面の傾斜は他の竪堀跡に比べて極めて急峻であり防御性に優れている。また、T1801検出地点では、北側から土砂が多量に流入したかのような堆積状況を呈するが、これは本遺構と並走する土塁が北側に存在した可能性を示唆するものといえよう。

千畳敷南側に設定したトレンチT1803では、曲輪を圍繞する横堀跡SD02を検出した。これによって、千畳敷東側の土橋部分を除き、全長234mにわたって全周することが判明した。また、埋土下層や不明遺構SX01からは土師質土器の坏が大量に出土したが、埋土の堆積状況より千畳敷側から流入したと判断される土砂とともに出土していることから、SD02の埋め立て行為に伴い、千畳敷側から流れ込んだと推定される。

その他、特筆されることとして、宇土城跡が築城される以前、千畳敷部分に存在した首長居館を圍繞する壕跡SD01（古墳時代前期）を千畳敷東側帯曲輪で検出したことがあげられる。以前の調査結果から、本遺構に囲まれた東西約80m、南北約95mの範囲に首長居館が存在したことが明らかになっていたが、その範囲がより明確になったといえる。

(2) 三城周辺における検出遺構（19～21次調査）について

19次調査では、三城南東側に位置する道路状遺構SF03（1次調査SX01）を検出し、1次調査で確認した地点からさらに南方向へ延びることが確実となった。また、千畳敷東側帯曲輪の調査で1次調査検出の溝跡SD07を33mの範囲にわたって部分的に検出した。調査の結果、三城や周辺の帯曲輪の配置状況とは無関係に東へ延びることが判明し、三城に通じる道路状遺構を削平していることや、1次調査で17世紀代の遺物が出土していることなどから、おそらく廃城後の造作とみられる。

また、21次調査では、三城東側に隣接する帯曲輪で12棟の掘立柱建物跡を検出した。これらの建物跡は、柱穴の重複関係や建物の主軸方向の相違などから、以下のように少なくともⅦ期にわたって存在したと想定され、建替えを繰り返して長期間にわたって当地に建物が存在した可能性が高い（図40）。

I期：SB25（SB24の可能性も有り）

II期：SB24（SB25の可能性も有り）、SB28

III期：SB26、SB29

IV期：SB27、SB30

V期：SB31、SB32（SB27と主軸がほぼ直交しており、SB27が同時併存した可能性有り）

VI期：SB33、SB34

Ⅶ期：SB35

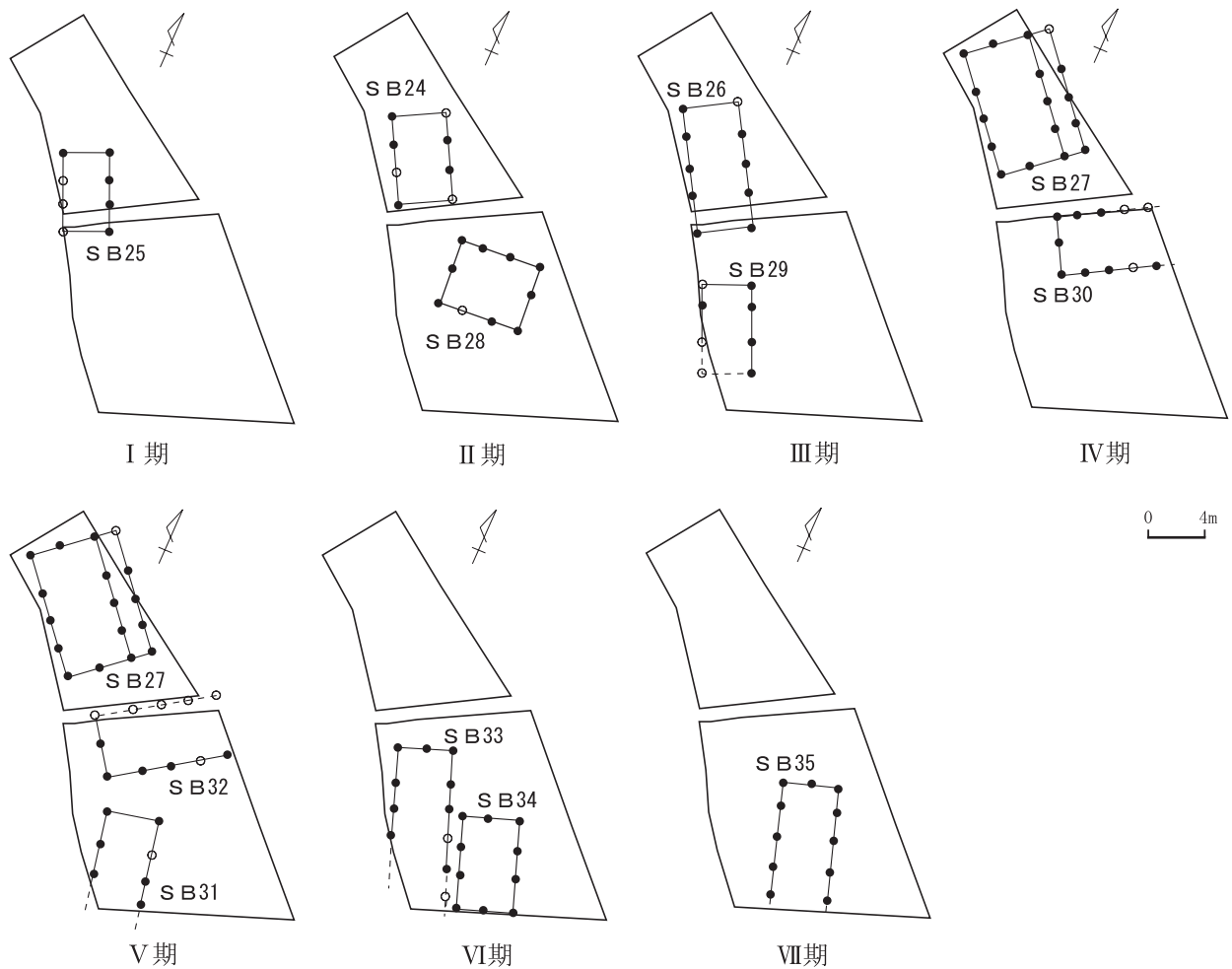


図40 21次調査区掘立柱建物跡変遷図

第3ブロック（三城及び周辺地区）における保存整備を目的として実施した第19～25次（平成18～24年度）の計7次にわたる発掘調査のなかでも、当該地点は特に遺構密度が高いことが判明しているが、その理由として次のことが指摘できよう。

領主や家臣団の屋敷地が存在したと想定される西岡台南側から三城へ入るためには、三城南側の道路状遺構S F 03を通行し、門跡S B 08を経て三城へと至るルートが想定される。つまり、S B 08周辺は三城の虎口に相当する空間であり、その北側に隣接する当該調査区周辺は、防衛上、重要な場所であることは明らかである。城の機能を支える何らかの建物（施設）が、恒常的にこの付近に存在した可能性が高いと判断される。